



少女は歩き続けました。
もうどれくらい歩いたかもわかりませんでした。
それでも目指すものはただ一つだけ・・・あの北極星です。
あの動かぬ星を目指してただひたすら進むだけなのです。
そのためだけに少女は歩きました。

「あの北極星の真下にある山は、北極星に一番近いんだってさ。
そこで三日三晩、北極星にむかってお祈りをすると願いが叶うんだぜ。」

あの少年が言ったことがウソであろうと真実であろうと関係はありませんでした。
少女に残された道はただ一つしかないのです。
北極星に願いを叶えてもらい、
少女のただ一人の肉親である兄を助けてもらうしかないのです。

少女はずっと幼い頃に両親を亡くして以来、
年の離れた兄と二人で生きてきました。
兄は優しく、真面目で勇敢でした。
そんな兄はいつも少女のあこがれでもありました。
二人は村から少し離れた山奥にひっそりと暮らしていました。
兄は木こりでした。
山奥にぽつりとたつ小さな家で、
家畜を飼い、木を切り、二人は暮らしていました。
幸せでした。
けれど何日か前、山で迷子になった少女の前にクマが立ちはだかったのです。
凶暴な熊で少女はその瞬間死を覚悟しました。
しかしそんな少女の前に現れたのは兄でした。
兄は少女を守りました。
けれどかわりに兄は致命傷を負いました。
医者はまだ手遅れだと言いました。
けれど少女はあきらめたくありませんでした。
そんなとき、村の少年たちが北極星の話をしていたのを聞いたのです。
そして少女は兄が死んでしまう前に北極星に兄の命を助けてもらおうと思い、
大急ぎで家を飛び出したのです。

歩いてても歩いてても北極星は遠ざかるばかりです。
北極星は夜空のものすごく高いところに輝いていて、
とてもそんな高さにとどくほどの山があるなんて思えません。
少女はそれでも歩き続けます。
そしてあっという間に夜もあけました。

少女はついに歩き疲れ、道ばたに倒れ込みました。

「早くしなきゃ・・・お兄ちゃんを助けなきゃ・・・」

そのとき無理して起きあがった少女の目には大きな山がうつりました。

「きっとあれだわ！」

少女は重い体を引きずるようにして山に向かいました。
山の斜面は急で道といえば細い獣道しか見あたりません。
それでも少女はその道をたどり山を登りました。

しばらくその道をすすむと、急に森林が途絶え、ひらけた平原に出ました。少女が目をこらすと、そこには一軒の山小屋がありました。

「人がすんでいるのかしら。」

するとその山小屋から、一人の老婆が現れました。老婆は真っ黒い服を着ていました。

「あれは魔女かもしれない！」

少女は驚いて逃げ出そうとしましたが少女はあまりに疲れていたのです。足がもつれて転んだ拍子に気を失ってしまいました。

少女が次に目を覚ましたとき、そこは小屋の中でした。

「おや、気がついたかい？」

老婆はしわがれた声で言いました。少女はおびえて目をつむりました。

「怖がることはないよ。別にあたしゃどっかの魔女のようにくっちまおうとは思ってない。もっとも、あたしも魔女だけどね。」

そう言うと老婆は声を上げて笑いました。そして少女に食べ物を差し出します。

「ほらお食べ。あんた、そうとう疲れているようじゃないか。大丈夫、どっかの魔女のように毒はいれちゃいないよ。」

少女は疑うように老婆を見ました。

「さあ、早くお食べ。食べないとあんたをカエルにかえちまうよ。」

少女はあまりの空腹に耐えきれず、老婆の差し出したスープの皿をひつつかむとすごい速さで口の中にかきこみました。

「よっぽどお腹がすいていたとみえる。」

いったいあなたはどこの子だい？
なんで一人でこんなところまでやってきた？」

老婆は優しく少女に尋ねました。

「わたし、北極星にお願いしにきたんです。
お兄ちゃんを助けてほしいって。
お兄ちゃん、死んでしまうんです！
北極星にお願いすれば願いはなんでも叶うってききました！」

老婆は目を閉じて小さくため息をつきました。

「そうかい。
どうせそんなこったろうと思ったよ。」

少女の頬には涙がつたいました。

「それは本当の話なんでしょう？
お兄ちゃんは助かるんでしょう！」

「ああ。本当の話だ。」

少女はほっとしたように笑顔を見せました。

「だけど、願いが全て叶うというわけではない。
北極星が叶えるのは死にゆく者を生きさせることくらいか。」

「それならお兄ちゃんは助かるんだわ。
それには頂上でお祈りをしなきゃいけないんでしょう？」

「ああ。お願いするだけでいいんだ。
ただ・・・」

老婆は表情を曇らせました。

「ただ、おまえはおまえの命を差し出さなければならない。
北極星は命を食べる星だからね。」

少女はその老婆の話を聞き、啞然としました。

「あたしの命？」

「そうさ。あんたのお兄ちゃんを生きさせるためにかわりにあんたが死ぬんだ。できるかい？」

少女の顔に一瞬戸惑いが見えました。
それでも少女はすぐに力強く頷きました。

「わかったわ。だってお兄ちゃんは命をかけてわたしを守ってくれたんだもの！」

少女は寝具をはねのけ、外套を羽織るとすぐに小屋から出ようとしてしました。

「あんたのお兄ちゃんが命をかけて守った命を棒にふる気なのかい？あんたは。」

老婆はその少女に問いかけました。

「あんたのお兄ちゃんはあるに命を捨てさせるためにあんたを助けたわけじゃないだろうよ。」

「でも・・・」

老婆は少女に近づくと椅子に座るように促しました。
少女は涙を目に浮かべ、ドアのほうをみましたが、言われたとおり椅子に座りました。

「いいかい？」

人っていうのは生きている理由がそれぞれあるんだ。
あんたのお兄ちゃんはきっとあんたを守ることが生きている理由だったんだろう。
そしてあんたは生かされた。
今生きているということは、まだあんたにはやらなきゃいけないことがこの世にあるってことだよ。」

「でも・・・わたし、お兄ちゃんがいなくちゃ一人ぼっちだし、生きている理由だってわからない。」

「わからなくて当然なんだ。
あんたはまだ若いのだからこれからその理由を探していくんだよ。」

老婆は優しく少女を見つめました。

「たとえばね、あたしゃしがない山奥の魔女だが、こんなあたしにも生きている理由がある。」

少女は涙をためた目で老婆を見ました。

「実はね、あたしは若いころ、不治の病に冒されてね。
死を待つだけだったんだ。」

老婆は目を閉じました。

「だけど、あたしの愛した人はあたしのための北極星に祈ったんだ。
そしてあたしの変わりに死んでいった。
まだ未来だってある人だったのに、こんなあたしなんかを救うために死んだ。
あたしの病はその後すぐに治ったよ。
そして今ではこの通り、元気さ。」

少女は何も言わず老婆を見つめました。

「でもね、その恋人があたしの変わりにしんでしまって、
残されたあたしはどう思ったとおもう？
誰かを犠牲にして生き残ったんだよ、あたしは。
そしてあたしが犠牲にして、あたしのために死んだのは・・・
この世で一番愛していた人だったんだよ。
後にのこったのは悲しだけだったさ。
あたしはあの人を命をすてることを少しだっただけじゃいなかった。
あたしが死んだあとも、幸せに長生きしてほしいって思っていたのに。」

少女は老婆から目をそらすと暖炉の炎を見つめました。

「あんたのお兄ちゃんはどうだい？
あんたに命を捨てさせたいとおもうかい？
そんなことを望んだとおもうかい？」

少女は考え込みました。

「でも・・・でもわたし・・・お兄ちゃんに生きていてもらいたいの。
今までわたしはお兄ちゃんがいて幸せだったもの。」

老婆はふいに立ち上がると少女を抱きしめました。

「辛いという気持ちはわかるよ。」

けどね、あんたのお兄ちゃんはあるあんたの幸せを何より望んでいるんだ。
お兄ちゃんがいなくても、あんたが幸せに生きていく方法はいくらでもあるしね。
お兄ちゃんが守ってくれた命だ。
一生懸命生きなさい。
お兄ちゃんのぶんも生きなさい。」

少女は声を殺して泣きました。

「あんたのお兄ちゃんがあんたを守った。
それはあんたのお兄ちゃんの生きてきた理由だとすれば、
あたしは、あんたのように誰かのために命を捨てようとする人を止めることが、
あたしの生きている理由だと思うんだ。
だってあたしは、他の人にあたしの味わった悲しみや罪悪感を感じてほしくないからね。
人はいつだって誰かのために何かをしてあげようと思うけれど、
それが全て良いことだとは限らないとあたしは思うね。
特にそのための犠牲が大きい場合はね。」

外は次第に日が暮れ、星が現れました。
森は暗く、星の明るさがはっきりと分かります。
老婆は少し落ち着いた少女を外に連れだしました。

二人は外に出ました。

「北極星はあれだ。」

老婆は北極星を指さしました。

「北極星にあんないわれが残るのには別の理由があるんだ。
ほうら、よく見てみなさい。」

少女は北極星を見つめました。
ふいに冷たい風がふいたとおもうと、北極星が一筋の光を放ちだします。
その光はまっすぐ延びて道のようにになりました。

「あれは？」

「あれは、通り道さ。
この世の中の生を終えた命があこの通り道を通り、北極星に吸い込まれて行くようだ。
死んだら星になるという話はあながちウソじゃないんだね。
その後は・・・きっと天国に続いているんだろうね。」

その北極星の光の中に、少女はいくつもの星を見ました。
けれどすぐに少女は、一見、星に見える輝きは命であるということに気づきました。

「お兄ちゃんも、あの中にいるのかもしれない。
わたしは・・・わたしは・・・お兄ちゃんを助けることばかりで最後に声もかけることもしなかつた・・・」

少女は涙を流しました。
すると、その時、北極星がいちだんと大きく輝きだします。
そして北極星の道の中から星が一つ、舞い降りてきたのです。
星はゆっくりと舞い降り、少女の目の前でとまりました。
するとその星はくるくると少女のまわりをまわりました。
そして少女はすぐ理解しました。
その星は兄の命の光なのであるということ。

「お兄ちゃん・・・」

少女はその光をみつめました。
その星は、少女を元気付けるかのように少女の目の前をくるくる回ります。

「あたし、生きるよ。
お兄ちゃんのぶんも生きるよ。
だから・・・心配しないでね。」

少女は小さな声でそういいました。
星は動きをとめ、しばらく少女を見つめるかのように漂っていました。
そして、ゆっくり・・・ゆっくり、北極星の光のすじをたどっていきます。
そしてその光はついに北極星の輝きの中に消えていきます。
少女は手を伸ばしました。
北極星にむかっていっぱい手を伸ばしました。
北極星は空高くにあつて、あまりにも遠く手に届くものではありません。
だから少女はのびした手をゆっくり降りました。
北極星に消えていった兄に見えるように大きく手を降りました。

おわり

Image Credit & Copyright: Steve Mandel ([Hidden Valley Observatory](http://www.hiddenvalleyobservatory.org/))

Research Collaboration: Adolf Witt ([University of Toledo](http://www.universityoftoledo.edu/)) et al.

from the website:<http://apod.nasa.gov/apod/ap080111.html>